

かわらばん

第38号 2021年6月7日



メールで読書会 1 藤原辰史著『縁食論 孤食と共食のあいだ』
……角田由紀子/伊東 輝/羽立教江/坂元良江/三井富美代

コラム おぼえがき「生理の貧困」……村山千津子

先逝く姉妹たちを悼む——

関 千枝子さんとのお別れ……丹羽雅代

ナワル・エル・サーダウィさん『0度の女』を読む……村山千津子

エリザベスさんにインタビュー……柳沢由実子

一票で変える女たちの会・Facebook から



メールで読書会 1

藤原辰史著

『縁食論 孤食と共食のあいだ』

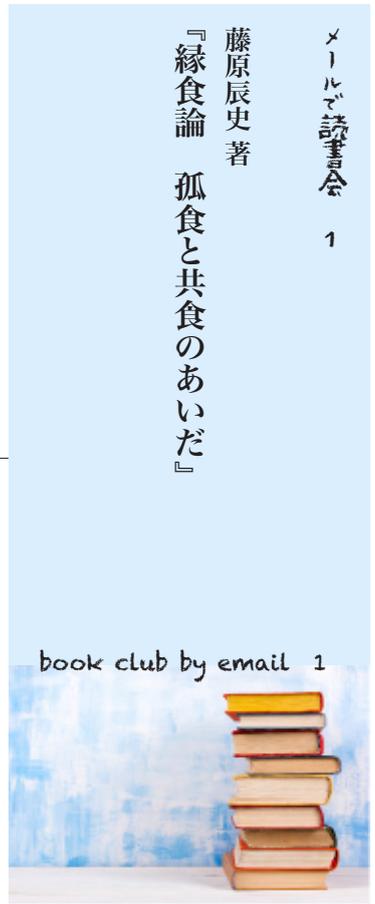
食べものは商品であるべきかとい
う問い

角田由紀子

私が藤原辰史という少壮学者を知ったのは、ちょうど一年前の「B面の岩波新書」に載った「パンデミックを生きる指針——歴史研究のアプローチ」であった。最初の緊急事態宣言が出て日本中がコロナでおたおたしていた頃であった。初めて名前を知り、内容の斬新さに目を瞠った。こういう歴史研究者がいるのかと驚いた。私の中にあつた歴史学者のイメージとは大いに異なつた。つまりは、私が無知であつただけだ。

藤原さんは、(自分のような)

想像力と言葉しか持たない文系研究者にできること、特に環境史という人間と自然(特に微生物)の関連を歴史的に考える分野にも足を突っ込んでいる人間にできることを考えた。その中で現在の状況を生きる手掛かりをとる希望を込めて一文を草したという。彼は、さまざま検討した結果、次のように述べている。「日本は、(各国と同様に)歴史の女神クリオによって試されている。……クリオが審判を下す材料は、いかに、人間価値の根切りと切り捨てに抗うかである。いかに、感情に曇らされて、フラストレーションを『魔女』狩りや『弱いもの』への攻撃で晴らすような野蛮に打ち勝つか、である」と。



『縁食論 孤食と共食のあいだ』
藤原辰史著（ミシマ社・2020年）
子ども食堂、炊き出し、町の食堂、居酒屋、
縁側…
オフィシャルでもプライベートでもなく
「新しい食のかたち」を、歴史学の立場から探り、描く。一本書の帯より
著者は1976年生まれ。京都大学准教授。
農業史、食の思想史を専門とする。著書に
『ナチスのキッチン』（水声社 2012）『給
食の歴史』（岩波新書、2018）『分解の
哲学—腐敗と発酵をめぐる思考』（青土社
2019）など多数。



藤原辰史という名前は私に強い印象を残した。それから暫くたってからのことであるが、行きつけの地元の本屋を覗いたら平台に積まれていた本が『縁食論』であった。迷うことなく買った。その本の奥付で過去の出版物を知り、次々にアマゾンに注文してしまい、若者言葉でいう「はまった」状態になった。これは私にしては

珍しい現象であったかも知れない。

さて、『縁食論』である。藤原さんによれば、縁食とは、孤食と共食の間にあり、「孤食ではない。複数の人間がその場所にいるからである。ただし、共食でもない。食べる場面にいる複数の人間が共同体意識を醸し出す効能がそれほど期待されていないからである。

縁とは、人間と人間の深くて重いつながり、という意味ではなく、単に、めぐりあわせ、という意味である。じつはとてもあっさりした言葉だ。めぐり合わせであるから、明日はもう会えないかもしれない。場合によっては、縁食が縁となつて恋人になつたり、家族になつたりするかもしれないが、いづれにしても、人間の『へり』であり『ふち』であるものが、ある場面の同じ場所に停泊しているにすぎない。これは『共存』と表現すると仰々しい。むしろ『並存』の方がよい。そんな緩やかな並存の場こそ、出会いも議論も、まずまずSNSに回収される現代社会

の中で、今後あると助かる人が多いのではないか（二七頁）。藤原さんはこれに続けて子ども食堂のユニークさもそこにあるのかも知れないと論を進める。縁は、都会の住宅からは今はなくなった縁側の縁でもある。縁側は室内でも室外でもない空間であり、その両者をつなぐものであった。幼い時代を過ごした私の田舎の実家にも縁側はあり、そこに腰掛けて足をぶらぶらさせているぼんやりした時間は心地よかつたことを思いだした。時間と場所の曖昧さが自由を実感させ、心地よさを生み出していたのかも知れない。

本書では、食と人をめぐるさまざまな思考が展開される。藤原さんが研究している給食の話も出てくる。それも都会生活では望むべくもない豊かな話だ。それらの中で私が一番心打たれたのは、イタリアの最高裁のある判決であった。スーパーマーケットで五〇〇円ほどのソーセージとチーズを上着の下に隠し、パン代金だけを払って盗んだ路上生活者の男の裁

判である。最高裁が一、二審判決を覆して無罪としたという判断の紹介であった（六二頁）。弁護士である私は最高裁が無罪にしたと明示してない藤原さんに「無罪にしたんですよね」と確認したい気分になるが、彼はそれには触れていない。弁護士と歴史家の関心の置き所の違いであろう。しかし、内容からして無罪にしたと読むしかない。一、二審とも禁固六年と一〇〇ユーロの罰金にしたのだ。しかし、最高裁は、「被告人は緊急かつ不可欠だった栄養摂取のために少量の食品を手にした。従つてこれは必要性にかられた状況における行為だった」と判示したとのこと。これは二〇一一年のことである、当時日本の新聞でも報じられたとのことだが、私には全く記憶がない。この話は、藤原さんが食べることがあるということとそれを食べることを述べるころででてくる。藤原さんはいふ。この路上生活者にとって、「あるもの」と「売られているもの」との差は「犯罪」を犯してようやく

埋まるものであったのだ。食べ物
はそこにあってもそれを買うお金
がない限り手を出せないという現
代社会の法則を指摘して論は進
む。食べ物、売られるもの、つ
まり、買わねば食べられないもの
であっていいのかということだ。
食べ物、自分で作ったものでな
ければ買って食べるのは当たり前
となつてはいるが、本当に当たり前
でよいのかという問いかけであ
る。「飽食社会の住人は、『食べ
ものが売られている』ことが『食べ
ものがある』ことと同意義である
状態に慣れていて、商品でない食
べものを想像することは難しい」
「食べものはやっぱり商品であつ
てそれ以外ではない、という世界
に私たちは慣れきつている」「で
は、もし、世の中に存在するすべ
ての食べものが商品という着物を
脱ぎ捨てたら、どうなるだろう
か」と問う。そしてこんな議論は
聞いたことがないが、彼は「もし
も、地域ごとに食べものが集めら
れ、生きていく人間に平等に分配
されるとすればそれはどんな社会
だろうか」と重ねて問う。(六三

六五頁)。

食べものは商品であるべきか
という問いだ。このくんだり、とりわ
け食べものを盗んだ路上生活者の
話を讀んだとき、突然、私の頭に
は、もう、一〇年以上前のある国
選弁護事件の自分の弁護活動が鮮
やかに蘇つた。今まで、ほとんど
思い出すこともなかった事案だ。
日常の仕事の一部である平凡な出
来事だ。私は、その時、窃盗犯の
男性を弁護していた。彼は元はイ
ンテリアデザイナーであつたが、
不況(リーマンショックか?)で
家が建たなくなり、彼の仕事も成
り立ちゆかなくなつた。新しい家
ができて初めて室内装飾屋の仕事
ができる。収入が断たれ、妻とは
離婚し、住む家を失い、路上生活
者となつた。路上に出る前に、自
宅の台所から果物ナイフ一丁は持
ちだした。これからも果物くらい
は買えるかもしれないと思つたか
らだ。彼は、あるとき空腹に耐え
かねてあるスーパーでお寿司を二
パックとリングゴ一個を万引きし
た。すぐに警備員に見つかり、一
口かじつたりリングゴと共に手つかず

のお寿司も取り上げられ、警察に
突き出され、逮捕され、窃盗罪で
起訴された。私は接見のとき、な
ぜお寿司なのかと聞いた。彼は寿
司なら日持ちがすると思つたと答
えた。私は切なくて思わず涙が出
た。あまりにも生活感のある答え
であつた。リングゴは皮膚が炎症を
起こしていたのでビタミンCをと
思つたからだということであつ
た。記録によれば、そのスーパー
は彼から取り戻したリングゴはもち
ろん寿司も商品にはならないので
と廃棄した。私は、それを讀んだ
とき、捨てるのであれば彼に与え
れば良かったのに、何も警察に突
き出すことはないのと思つた。
法廷で、私は、彼がホームレスに
なつたいきさつを述べ、二度とこ
んなことはしないと誓つているの
だから、執行猶予にすべきと平凡
な弁論をした。彼は前科もなかつ
たので執行猶予となつたが、拘置
所から出されると行く当てがな
かつた。拘置所にいれば三食食べ
られたが、それでも、自由になり
たかつたし、拘置所は執行猶予に
なつた人間を收容することはでき

ない。

私は、その被告人にはかなり
頻繁に接見し、事情を理解してい
たが、イタリア最高裁の判事のよ
うなことは思いつかなかつた。私
は、彼は生きるために正当な行為
をしたと弁論できなかつたのだ。
従つて、無罪であるとも主張でき
なかつた(刑法三五条は「法令又
は正当な業務による行為は、罰し
ない」と定めており、憲法一三条*
を根拠に弁論ができたかも知れな
い)。このエピソードに出会つて
私は顔から火が出るほど恥じ、後
悔した。食べることは、生きる権
利の行使として空気や日光が今の
ところただであるように、ただで
保障されるべきではないかという
藤原氏の夢想到賛同した。このア
イディアはコロナ禍の中で切実に
現実味を持つて私の中でうごめい
ている。あの時の平凡な弁論への
後悔の念と自分への落とし前を付
けねばという思いにかられてい
る。アルバイトを失つて無収入に
なり、昨日は水を飲んだだけです
という学生や、子どもにせめて三
食食べさせたいので自分は毎日一

食だけというシングルマザーの訴えを新聞等で読む日常に私たちはいる。食べものは買うものであつてよいのか。買えない人は飢えて死ねといえるのか。コロナの時代の根源的な問いである。

二〇二一年四月一五日

*編集注・憲法二三条は個人の尊重、幸福追求権及び公共の福祉について規定。一一條、一二條とともに人権保障の基本原則を定める。



齋藤幸平著「人新世の『資本論』とのつながり

伊東 輝

COVID・19が日本でも広がり始めて一年あまりになる。一年前の四月に私も角田さんと同じように「パンデミックを生きる指針」*を読んで藤原辰史氏を知った。柔らかな語り口の中にも「起こりうる事態を冷徹に考える」という

姿勢に覚悟を読みとった。

同じ四月にもう一つ「かわらばん」31号で渡辺真知子さんが『食料』く私たちの命のみなもと」を問題提起され、以前から私も感じていたフードロスの問題等々を真剣に考えようと思った。そしてその後、歴史や食をめぐる本を読み続けた。

この二月に『縁食論』の読書会が提案され、さっそく読んだ。藤原氏の「食」についての視点は広がりを持つている。個々のテーマについては他の方におまかせして、私は唐突だが別の方向に話を広げたい。

昨年九月、気候変動の危機感の中で齋藤幸平氏の『人新世の「資本論」』が出版されたが（私も早速読んで「かわらばん」34号で紹介。その後この本は多くの人に読まれ、最近では短い動画でも紹介されている*）、その齋藤氏の述べるコモンの考え方が藤原氏の「食」の考え方に通じるのではないかと思った。

とは言ってもはじめてこの二冊

を開いてくださる方には理解しにくいかも知れないので、まず齋藤氏の本についてエッセンスを紹介する。――今世界で起きている環境危機（パンデミックも含め）、貧富の差の拡大などは、人類の経済活動がもたらしたもので、それを阻止するためには資本主義の限なき利潤追求を止めなければならぬ。SDGsやグリーン・ニューディールなどでは解決できない。持続可能なエネルギーを管理する方法を、自由で平等な市民のハコモンに求め、それが共同で運営していくことに可能性を見る。

このコモンの考え方は「食」の問題ではどうなるか考えていた三月に、「中央公論」三月号で藤原氏と齋藤氏が「資本主義のオルタナティブく農に第三の道あり」と題して対談していることを知った。その中で藤原氏が「私は食と農の分野でコモンの概念を使って議論を展開してきました」と述べていたのだ。たしかに『給食の歴史』（岩波新書、二〇一八）でもパブリックとプライベートの視点

でいいいに見て給食の歴史の中の可能性を追求していた（この本は私たち自身の学校時代の給食を広い視野から見るとに最適である）。

そして、その対談からいろいろ調べていて発見したのは齋藤氏が釜ヶ崎にフィールドワークに行き「大人食堂」（利用者が、耕作放棄地で無農薬栽培した野菜を皆で調理し、食べる）に関わる動画である。***

齋藤氏もまた経済学の視点で考える中で、「大人食堂」にひとつの可能性を見たように思う。

なお、「食」が論じられる多くの場合「食」を支える家事労働はまだまだ女性に負わされるのが自明のようになっていくことが多く****、そのことからこの本に抵抗感をもつ人がいるかもしれない。しかし藤原氏はそのことも問題としておさえていて、「給食の歴史」でもその問題を取りあげていた。目線は低く、ぶれていない。

私が一つ注目したのは「学校の縁食は義務教育ではやはり給食を

ベースに考えられるべき」とし、長期目標として①家庭科の調理の時間を増やす。児童にとつて料理は理科の実験に近い。②作物の栽培地で食材を購入したり、漁村で新鮮な魚を仕入れることは社会科の勉強になる。③食材を自分たちで育てる、と展望していることである(『縁食論』八三〜八五頁)。三〇年以上前に家庭科男女共修を求めて広げられた運動も思い出されるが、単なる共修に終わらない再検討の参考になると思う。

最後に、「縁食論」の「縁」は食の一つの形であるが、人とのつながりも含意する。この本につながる多くの方々に感謝する。また「中央公論」三月号の対談のことを知ったのも「公正な税制を求める市民連絡会」の会員のメールによつてであり、この縁にも感謝する。

- * <https://www.iwanamishin-sho80.com/post/pandemic>
- * <https://www.youtube.com/watch?v=eALQA8FQmnc> なる
- *** <https://www.mbs.jp/mint/news/2020/12/25/081245>.

shumi

*** 藤原氏自身、男性も料理をすることを自明のことと考えているようで(それは語られていないが)、料理研究家で社会活動も積極的に行っている(ビッグイシュー参加、夜のパン屋さん運営など) 枝元なほみさんとの往復書簡(「生活と自治」二〇二〇年七月号)でも共感の言葉が交わされていた。

二〇二一年五月四日



今は亡き息子との食事

羽立 教江

「私たちは死者とともに食べている。死者はきつと私たちと食べている、と信じて食べている。そうしなければ、どうして人間は、親しい人の死に耐えられようか」(二二一〜二二三頁)。

このフレーズを目にした瞬間、「そうだったのか!」と、もう二四年近く続いてきた我が家の「無意識の食事の習慣」に思い及び、平成九年十二月二十四日、当時北大四年生だった長男の死が、私の心の中に及ぼした働きの大きさをあらためて認識させられた。

現在の私達家族の日常の食事の習慣が、いつ頃から始まったのか、記憶は定かではない。今は亡き長男の食膳を、私共の日常の食卓に整えることを始めたのはいつ頃だったのか、又、その動機や具体的なきっかけ、当時の心境など、いまでは詳らかには思い出せなくなっている。

気が付いたら、食卓は、いつも

同居の家族プラス一人前、長男の席には、彼の写真(ラグビーのジャージーを着て微笑んでいる二三歳当時のもの)が仏壇から移動して置かれていた。

旅行をしたり、家族で遊びに出かけたり、身内の行事、冠婚葬祭の際には、必ず彼の写真を仏壇から取り出して携行する。身内であれば、相手も必ず彼の席を準備していてくれる。家族で外食する際にも写真を携行して、彼の席として一人分余計に席を設けてもらう。

遺されたふたりの弟妹が、各々独立して家を離れた後の我が家の食卓は、いつも三人前、各自が座る位置も決まっている。

私は、今では、ほとんど無意識に、毎日、三人分の食事を用意する。長男が嫌いなニンジン(人参)を、彼の食器から取り除くことを忘れない。そうして三人分の食膳を整え、それぞれ三人分の席を設けることが、最早、当たり前のことになってしまった。三度の食事だけでも、頂きものを食べるときも同

じである。季節々々の初物も、真つ先に彼の写真の前に置く。とにかく、家で飲食をする場合は、必ず彼と一緒に飲んだり食べたりするので、「孤食」はあり得ない、ということに初めて気付かされた。

日本には、昔から「かげ膳」という言葉があるが、私達の習慣が、果たしてその言葉に該当するものなのか、定かではない。

「食べるとき、死者と同じテーブルについていると思えば、それは縁が切れていない、ということの意味する」

「人間は、死者とともに生きる能力を持っていることだ」

「食がつかなく縁は、戦争よりもしぶとい……縁は剣より強いのである」(一二三〜一二四頁)。

本当に、そうであつたら嬉しいと思う。

二〇二一年五月



コレクティブハウスの「コモンミール」という共食

坂元良江

久しぶりのコモンミールに二十七人の居住者たちが集まって来た。メニューは牛丼、ホウレンソウの胡麻和え、キャベツと油揚げの味噌汁、それに手作りのバナナクレープのデザートが付いて五〇〇円。牛肉は近くの高級肉店のバーゲンセール日に買った切り落とし牛肉、調理を担当した人が前もって買っておいしてくれたものだ。

私の住む「コレクティブハウスかんかん森」には一歳から八三歳までの男女四三人が二九戸の居室に住んでいる。子ども二人の四人家族、カップル、単身者と家族構成は様々だ。それぞれの部屋にはキッチンもお風呂もあつて独立した生活ができるが、広い共用のスペースや菜園などがあり自分の住まいの延長としてそこを自由に使い、暮らしている。スウェーデンに学んだ自主管理、自主運営の共生の住まいだ。

藤原辰史さんの「縁食論」を読んで思いが至つたのはやはり自分が経験しているコレクティブハウスのコモンミールについてだった。「縁食」に比べて意図的に作られた「共食」ではあるが、居住者たちが自由に立ち寄る共用のコモンスペースは私たちの「縁側」のような気もするのだ。偶然の縁(えにし)から何かが生まれることの少ない現在、コレクティブハウジングは人と人が繋がる一つの試みではあると思っている。

コレクティブハウスの核はコモンミールという共に作り、共に食べる食事だ。月に一回都合のいい日に三人で組んで調理を担当する約束。食べる、食べないは自由だ。コレクティブハウスは世帯単位ではなく個人単位だから夫たちももちろん調理は担当する。週に二、三回のコモンミールを目指したいところだが忙しい都会の暮らして働き盛りの人たちはなかなか調理の時間を作れない。

そこへコロナが襲ってきた。去年春、緊急事態宣言が出てコモンミールは全面中止となった。集

まって食べることを自粛したのだ。最初の緊急事態宣言が解除されたあと、調理は義務ではなく、もし調理をしてもいいという人がいて、食べてもいいという人がいれば万全のルールを作つてそれを守り、十分な注意を払つて有志コモンミールをやりましようと思つた。

それから一年、有志コモンミールは月に二、三回は行われている。毎回二〇人以上の人たちが食事には参加する。三〇人を超えたこともある。ほぼ通常のコモンミールと同じ人数だ。みなと一緒に食べることを楽しみにしていることがよくわかる。四〇人座れるダイニングルームは間隔を置いてテーブルと椅子を配置、今は二〇数人しか座れない。テラスに出たり、帰りが遅い人もいてなんとか解決している。

食事に参加した居住者たちは、近況を伝えあい、子どもの運動会のこと、近くにオープンしたスーパーマーケットのこと、ワクチンやオリンピックを話題に話す、話す、話す……。もちろん食事が終

われはマスクは着用、ディスタンスには十分気を付けている。コモンミールが居住者たちにとつてどれほど大切なコミュニケーションの場なのか、集まって食べるコモンミールがあるからこそ自分たちのコミュニティが成立しているのだということは今更のように実感させられる。

病気になると、買い物しないうかオンラインやメールで連絡が入る、食事や差し入れを玄関まで届けるのは当たり前のことだし、シングルマザーが病気の時は小学生の息子さんの食事を交代で一週間作った。お互いをよく知っているからいざという時も助け合うことができるのだ。

コロナ禍でもかろうじて保たれている内部での交流ではあるが、地域との交流を求めて年に二回開催していたオープンコモンミールも、コレクティブハウスに関心を持ちサポートしてくださるサポート会員をコモンミールやイベントにお招きすることもできないのが現状だ。

広いキッチンで、おしゃべりを

しながら野菜を切り、料理を教え合い、みなに美味しいと喜んでほしい、語らいながら食事をして、時には飲み交し、食後のコーヒーを入れて夜更けまでコモンダイニングに長居してしまう、そんな日常が早く戻って来て欲しいと心から願っている。

二〇二一年五月二十九日・三回目の緊急事態宣言中に



子ども食堂と図書館

三井富美代

二番手の伊東輝さんが言及された『人新世』と、この『縁食論』には「コモン」という言葉が共通して使われている。両書をほぼ同時期に読んでいて、その言葉が気になった。

日本では「パブリック」という言葉の方がなじみ深い、「コモ

ン」とはいつたいてい違うのかとネット検索してみたが判然としなない。「パブリックなコモンスペース」なる言葉まで出てきてよければひいてみて、「共」の意を接頭語にもつコモンは人との繋がりや関わりが期待され、「公」の意が中心のパブリックはそこにあることが期待されると、我流に解釈した。前者はソフト、後者はハードと言つてもいいかもしれない。かたやコモンミールかたや居酒屋。

そういう意味で「子ども食堂」は「コモンなパブリックスペース」なのだろう。今や全国に五〇〇〇箇所以上（NPO法人全国子ども食堂支援センター調査二〇二〇年）あるそうだが、そのあり方はさまざまなのようだ。私の参加する毎月一回の食堂は、『縁食論』でいう「弱目的」性の強い「ゆるやかな」タイプである。要するに誰でも歓迎で、その中に一人でも困窮した子どもや大人が混じつてくれていたらいい。孤独な人、疲れた人にとつてひとときでも「居場所」に

なつていればよりいい。直前に食材提供があつてメニューが変わつたり、六〇食のはずが八〇食といきなり増えたり、調理場はたいいてんやわんやで、スタッフが来客と「縁食」できることは滅多にないが、まあいいかという調子である。ところがこのCOVID19流行で、食堂は閉鎖、テイクアウトのみになつてしまった。それでも助かる人がいればやる意味はあると言いつつ続けてきた。

場所は公的施設を借りている。食事代は小学生以下は無料、高校生まで一〇〇円、大人二〇〇円。共同募金会などからの寄付があれば無料にすることもある。通常はいただく食事代だけでは賄えないので、提供される食材やカンパで補っている。スタッフの中には可能であれば無料で提供したいと思う人は少なくないだろうと思うが、無料がいいのか有料がいいのかは、改めて議論の必要なテーマなのだろう。私自身は「子ども食堂」は本来行政がやるべき仕事を民間が肩代わりしているという気がする。

それにしても、一日一食で生きることに苦悶しているシングルマザーに対して、月一度の子ども食堂はあまりに無力だ。著者が提唱するような、誰もがいつでも堂々で行ける無料の食堂があればどんなにいいだろうと思う。でも、そこはどんな場所だろうか。食事や食材が無料で手に入る公共の場所とは、どんなところだろう（少なくとも、映画『ダニエル・クレイグ』に出てくる、寄付された食材などを並べてホームレスや困窮した人に提供する、味気ない建物の一室ではない。それすら日本ではほとんどないけれど）。

公共、パブリックという言葉から私が最初に連想したのは図書館が主役の二本の映画だ。

『パブリック 図書館の奇跡』(The Public) は大寒波に襲われた真冬のシンシナティで凍死の危機にさらされたホームレスたちが図書館を占拠し、ひとりの図書館員が彼らと共に……というヒューマンドラマ。もう一本は『ニュー

ヨーク公共博物館 エクス・リブ

リス』(Ex Libris: The New York Public Library)。世界最大級の知の殿堂というだけでなく、住民による子どもの学習支援、演劇やコンサート、就職支援や企業セミナーなど市民に必要とされるさまざまなサービスをも提供するNYの図書館のドキュメンタリー。運営主体は市民のNPO、行政の補助金と民間の寄付で成り立っている。一九世紀の荘厳な建築物である本館のほか、市内に九二の分館があり、成熟した文化、社会とはこのようなものなのだと、つくづくうらやましく思う。

このような場が「食」のためにあつたらいい。本を無償で貸し出すように、食を無料で提供する公共食堂。居心地の良い温かい場ともなり、学習や交流の場ともなる食の館。誰もがいつでも堂々と出入りできる食の場がある社会とは、真に豊かな成熟した社会といえるのではないだろうか。

(文中の二本の映画はネット配信で視聴できます)



おぼえがき

生理の貧困 村山千津子

コロナ禍で、少女・女性たちが経済的に困窮して生理用品が入手できない「生理の貧困」が顕在化した。私が住んでいる地域でも女性の区議会議員が生理用品の保障への取り組みを区に求め、3月下旬、男女共同参画活動拠点など区内7か所で無料配布が決定した。防災備蓄用の配布であり、期間が2週間と短く、在庫がなくなり次第終了といった不十分なものではあるが、とりあえず具体的な対応がとられたことは一歩前進だと思った。またこの件に関して、82歳の方が「生理用品や緊急避妊薬のことを区議会で話題にできる時代になった……」と話していると友人から聞いた。感慨深いものがあったのだろう。

東京・品川区、多摩市、千葉県君津市、神奈川県大和市は公立小中学校のトイレに生理用品を設置することを決めている。20代の女性たちがつくる団体「#みんなの生理」では、生理用品は行政の責任で配布すべきと、学校トイレへの無償設置

を政府や小中高の校長会に求めるネット署名を開始し、現在24,000筆を超える勢いだ。

フェミニズム先進国では日本よりはるか先を行く。2020年11月にスコットランドが「全女性が、公共施設において、いつでも無償で生理用品を受け取れるようにする」法律を可決。ニュージーランドは、2021年6月から学校で生理用品を無料で提供することを決定した。若者の12人に1人が生理用品を買う経済的余裕がなく、授業を欠席していることが問題になっていたという。

無視されなおざりにされてきた「生理」がもっと語られ、女性の健康や安心のために生理用品が無償で入手できることはもちろん、生理の痛みを軽減するための医療の研究・開発などもどんどん進んでほしいと願う。

(2021年5月5日)

先逝く姉妹たちを悼む

関 千枝子さんとのお別れ

丹羽雅代

また大事な友人が旅立ってしまいました。

関千枝子さんです。二月二日、八八歳で死去されました。

関さんは一九三二年東京生まれ。満州事変が起こされ、一五年戦争が始まった年です。関さんの生涯は戦争とともにあつたというわけです。

一九四四年、父親の仕事の関係で広島に移ったのが一三歳の時。旧県立広島第二高等女学校に通いました。二年生の夏、八月の広島に原爆が投下されたちようどその日は、関さんは体調が悪かつたため、学校を休んでいました。自宅は爆心地から三キロメートルほどの距離でしたから、いったい何事かと不可解な気持だつたそうです。実はクラスメートたちはその日、爆心地から一キロメートル余

敗訴。

二〇一九年には天皇の退位、即位の礼・大嘗祭等一連の代替わり儀式の違憲性を問う裁判にも参加しています。もちろん安民法制違憲訴訟も。

関さんは安保違憲訴訟の原告としての証言台では、自分の広島での原体験もすっかり話されましたが、幼い子どもたちがいかにして加害側に何の疑いもなく巻き込まれていったかを、子どものまりつき遊び歌を歌って示されました。かわいらしい声でした。

この二つの裁判は現在も継続中です。

東京に戻って大学を卒業後、彼女が選んだ仕事は新聞記者でした。毎日新聞で働いた後、夫の転勤で渡米。帰国後、全国女性新聞に入社し、編集長も長らく務めました。書くことが全く苦ではないの、とよく言われていて、うらやましかつたことも覚えています。つい先ごろまで、WEBマガジンやブログをせっせと書いていらつしゃいました。

一人暮らしを楽しんでいましたが、二年ほど前に大腿骨を骨折でもあちこちで杖を突いて歩く関さんと出会いました。やっぱり一人暮らしがいいのとはよく言われていました。

一九七五年、広島に原爆が落とされてから三〇年、関さんは、クラスメイトの一人一人がどんな経験をさせられたのか、丁寧に家族を訪ねて話を聞いて回りました。はじめは名簿もない状態でしたが、人づてに探し、八年がかりで『広島第二県女二年西組―原爆で死んだ級友たち―』（筑摩書房、1985）をまとめて出版されました。

それが契機だったのでしようか、次々と本を書かれました（『この国は恐ろしい国』人間選書農山漁村文化協会、1988、『ヒロシマ花物語』汐文社、1990、『若葉出づるころ―新制高校の誕生』西田書店、2000、『ヒロシマの少女たち 原爆、靖国、朝鮮半島出身者』彩流社、2015、ほか）。親しい友人との往復書簡などは大変楽しい経験だつたようで、いろいろトライされてきました。

関さんの頭の中には、いろいろな企画がまだまだたくさんあるようでした。いっぱい書かずにはいられないでしょうからと、娘さんは棺の中に原稿用紙とペンもちゃんと入れられたそうです。

最初は人に頼まれて、でも途中からはご自分自身のご希望で、毎年夏には若い人たちのためのツアーガイドもされてきました。「伝えたいことが多くなりすぎて欲張ってしまうから、お客さんはきつと大変だと思います」、なんて、中学生たちのガイドの様子もお聞きしたことがあります。今が一五年戦争の時代と大変よく似ているとよく言われました。

先逝く姉妹たちを悼む

ナワル・エル・サーダウイさん

『0度の女』死刑囚フィルダス』を読む

村山千津子

今年の三月二一日、エジプトの作家・精神科医で、長年独裁政権と闘い続け、フェミニスト運動を

中国や、韓国、北朝鮮への恐怖心の裏返し、悪口雑言も増えていること、起こつてしまえば戦争の火の手はとても消せない、領土問題へのあおりが一つ間違えば戦争につながる、今もハラハラされているのじゃないかなと思います。

まだまだ多くの人に伝えたいことがたくさんあったことでしょう。亡くなるのがはやすぎました。山ほどの資料が残されているそうです。みんなの背中を押す役よりは引つ張る役のほうがお似合いましたから。心からご冥福をお祈りいたします。

牽引してきたナワル・エル・サーダウイが亡くなった。彼女は多くの本を書き、日本でも八〇年代後

半から『0度の女』死刑囚フィルダス』、『イブの隠れた顔』アラブ世界の女たち』（村上眞弓訳 未来社 1988）、『女子刑務所―エジプト政治犯の獄中記』（鳥居千代香訳 三一書房 1990）などの小説、

エッセイ、獄中記が何冊も翻訳されている。それにもかかわらず今回彼女の訃報は日本国内の新聞やテレビではまったく報じられることがなかった。中東に関する記事はもともと少ないこともあるが、女性の権利のために尽くしてきた世界的には著名な闘士であつてさえ、こと女性に関しては無関心な日本のメディアの姿勢が現れているといえるだろう。彼女の闘い、次世代に与えた影響や功績については NPR（米公共ラジオ局）の記事が詳しいので別掲した。

私は八〇年代末に『0度の女』を読んで強い印象を受けたが、あくまでもはるか遠くの異なつた世界、違う文化をもつ国での出来事を描いたものであつて、日本の現実社会に引きつけて考えることはなかつた。サーダウイが亡くなつたことを聞いて、久しぶりに『0

度の女』を本棚から取り出し読み返してみたのだが、当時と比べてはるかに大きな驚きと衝撃を受け、この小説の意味や意義について考えることになった。

サーダウイは精神科医として働いていた七〇年代当時、『精神病』に苦しみ助けを求めて彼女のもとを訪れる女性たちと接するなかで、エジプト女性のノイローゼについての研究を始めていた。そして病院だけではなく刑務所へも足を運び、そこで、男を殺害し絞首刑が決まっていた一人の女性、フィルダスと出会う。自分の人生について語るフィルダスの話にサーダウイは心を打たれ、彼女の生き方に称賛の念をいだき、のちにこの小説を書こうと思いついた。『0度の女』は実在した女性



エジプトにおけるフェミニズムの“ゴッドマザー”死す

ナワル・エル・サーダウィ回顧

(NPR: ナショナル・パブリック・ラジオ) 2021年3月28日付記事*より抄訳)

殺害の脅迫、検閲、亡命、投獄を耐え抜き、数十年にわたって家父長制との闘いを続けたナワル・エル・サーダウィが3月21日、カイロで老衰のため亡くなった。彼女の口を封じようとしたエジプトの2人の大統領、彼女を投獄したアンワル・サダトと彼女の著書を検閲したホスニ・ムバラクより長生きした。89歳だった。

エル・サーダウィはアラブ世界において女性の権利を擁護する最大の発信者だった。ジャーナリストであるモナ・エルタハウィのような現代エジプトのフェミニストたちはサーダウィのことを、エジプトで今沸き起こっているフェミニスト革命を「守り育てた強きリーダー」だと考えている。「フェミニズムは人々が生きているその土地の中から生まれるもので、輸入しなければならないものではないことを彼女は思い出させてくれます」。会報「フェミニストジャイアント」の著者エルタハウィは言う。「彼女の家父長制に対する闘いはずっと生き続けるでしょう」

エル・サーダウィは作家になりたかったが、医者になるよう両親に説得され医学校へ進むことになった。「人生でずっと書き続けてきました」。彼女は2011年にe-fluxが出版したインタビューでこう語っている。「書きたいと強く思ったのは、私のまわりで起きていることを見過ごせなかったからです」。故郷のカフルターラ村で医師として働いた経験によって、彼女は農村地域の女性たちが地域全体を覆う根強い不平等と抑圧に苦しむ姿を目の当たりにすることになった。

エル・サーダウィがFGM（女性性器切除）を「女性と性」誌で批判し、公然と非難したとき、彼女は即座に保健省の所長という地位をはく奪された。自身の著書『イブの隠れた顔』のなかで彼女は6歳の時に受けたFGMによって負った深刻な体験を思い起こし語っている。

彼女の最も有名な小説である『0度の女』（1978年ベイルートにおいてアラビア語版で出版）は、死刑囚となったセックスワーカーの話に触発され生まれたものだが、エルタハウィはこの小説に感化されて、エジプトの軍事体制とその家父長制に反対し、書き、抗議するようになった。「エル・サーダウィ自身の人生

が明確に示していたように、真実を語るためには粗暴で危険であれと鼓舞してくれたのです」。エルタハウィは3月24日のインタビューでNPRにこう語った。「そして権力が2011年タハリール広場に向けて私を逮捕しようと重装備の警察を送り込み、彼らが私の腕を折り、性的暴行を加えたとき、私は粗暴で危険な存在であることの代償を理解したのです」

エル・サーダウィはさらにアンワル・サダト政権には民主主義と自由がないと公然と声を上げたため、1981年に約1600人の反体制派の人々とともに2カ月間拘留された。獄中で彼女は仲間がこっそり持ち込んで渡してくれた黒のアイライナーとトイレトーパーを使って獄中記を執筆し、また「アラブ女性連帯協会」を組織して女性の社会的、経済的、文化的、政治的参加を推し進めようとした。サダトが暗殺されると彼女は拘束から解放されたが、今度はイスラム過激派からの殺害の脅迫と対峙することになった。時の大統領だったホスニ・ムバラクが彼女の護衛のためとして武装警備を強要しようとした時、彼女はそれを拒否して1993年にアメリカへ亡命し、エジプトへ戻ったのは1996年だった。

年齢を重ねるほどエル・サーダウィの行動は激しさを増し、2005年の選挙の時には大統領職にあったムバラクの長期政権に対抗して大統領選に出馬。ムバラクは彼女の選挙活動を制限し、キャンペーン運動にひどい妨害を加えた。2011年、彼女はタハリール広場でムバラク政権に抵抗の声を上げた。

「刑務所にいるとき、看守が私にこう言いました。『もしあなたの監房に紙とペンを見つけたら、それは銃を発見するよりも危険なことだ』と」。2018年のロイターとのインタビューでエル・サーダウィはこう語っている。「私には死への恐怖がなくなったのです。投獄への恐怖がなくなったのです」

(訳・文責：村山千津子)

*<https://www.npr.org/sections/goatsandso-da/2021/03/28/981250606/the-godmother-of-egyptian-feminism-has-died-remembering-nawal-el-saadawi>

の物語である。

フィルダスは下層階級の貧しい百姓の娘に生まれた。幼いころから水を入れた重いつぼを頭の上に乗せて運び、動物の排泄物を掃除し糞を乾かし、練り粉をこねパンを焼く日々だった。十分には食べられず、たくさんいた兄弟、姉妹は次々に亡くなっていたが、非情な父親は子どもが死んでも気に留めることはなかった。家に食べ物がない時でも自分ひとりはいつも通り食事をし、毎晩妻を殴っていた。同居していた叔父は時々フィルダスの体を触っていたが、勉強をしたかった彼女はカイロの大学に通うこの叔父と一緒に連れて行ってくれるよう頼みこみ、やがて両親が亡くなるとカイロで叔父と暮らすことになる。叔父の助力で小学校を終え、上級の学校へ進むこともできた。女子寮で生活し、好きなだけ勉強し、友達と語り、図書室で多くの本を読み、優しい女性教師に淡い恋心をいだくこともあった。将来の夢は医者か技師、弁護士か裁判官になること。

彼女は優秀な成績で高等学校を卒業した。

しかし、彼女の未来は断ち切られた。卒業後叔父の家に帰ると、厄介払いしたい叔父夫婦によって彼女はやもめ暮らしをしている六〇歳をすぎた老人と無理やり結婚させられる。フィルダスの一挙手一投足を見逃さず、何かにつけて文句を言い募るこのケチな夫は、徐々に激しい暴力をふるうようになつた。大きな棒で鼻や耳から血が流れるほど殴られた時、彼女は家を出る決心をする。体に傷を負い呆然となつて行くあてもなく路上をさまよう若い娘に、優しい言葉で男たちが近寄つてきて、温かい食事と宿を提供してやろうと言葉をかけるが、彼らはみな彼女の体を蹂躪し、利用するだけだった。こんな街の生活が続いていくうちにフィルダスは父や叔父や夫が自分には決して自由にさせなかつた「金」がもつ力に気づくようになり、数年の歳月を経て、嫌いな客は拒絶し、好きな男だけを選び、清潔なアパートに住み、コックを雇つて好きなものを

食べ、アパートの一室には図書室まで作る裕福な生活を築きあげることができた。彼女は誰にも自分を管理させず自分の体を自分のもにすることができたと思つた。

一度ジャーナリストだか作家だか「教養のある客」に「尊敬に値する人じゃないね」と言われてショックを受け、肌身離さず持っていた高等学校の卒業証書を手にしたが、驚いたことに女子従業員の生活は売春婦と比べてもとても尊敬に値するようなものではなかつたことに気づく。安給料のため住むのはトイレが共同の汚れたアパート、通勤のバスの中で体をもみくちゃにされ男の生殖器を押しつけられ、差別や配置転換を恐れ得ないのが彼女たちの境遇だった。ある日会社の中で経営者と闘い労働運動のリーダーと崇められているイブラヒムと出会い、愛を交わすようになる。フィルダスは愛を通して救われることを望み、この恋に自分のすべてを投げ出したが、結局のところ「革命家」の

彼は社長の娘と婚約し、彼女を捨てた。

このときフィルダスは、現実がどのようなものか、真実が何かについて、はつきりと気づき悟る。「私が今、何を望んでいるか分かりました。もう幻影をいだくことはありません。成功した売春婦のほうで欺瞞のエセ聖者よりもましでした。どの女性もごまかしの犠牲者です。男は女たちにごまかしを押しつけ、裏切られるのがこわくて女たちを罰し、女たちを最下層に無理やり落とすのです。そして低いところに落ちたことを理由に女たちを罰します。結婚に縛りつけ、一生卑しい奉仕をさせて、侮辱し、殴りつけて懲らしめるのです」

彼女は成功した売春婦となつた。噂を聞いた大物の政治家や外国の要人が競つて彼女の歓心を買おうとし、手はずを整え人をよこしたが、彼女はこうした男たちを拒絶した。「私は新聞に載っている男の写真を見つけたたびに、彼らに唾を吐きかけました」。いまや彼女は名誉を守るために弁護士

を雇うことも、中絶の費用を払うこともできず、さらに慈善団体へ寄付することもあつた。しかし、金の臭いをかぎつける男たちは彼女を放つてはおかない。ぼん引きをしている危険な男がやってきて、稼ぎの分け前を要求し暴力で脅しナイフを取り出した時、男よりも一瞬早く彼女は自分のナイフを男の首に深く差しこんだ。彼女は誰の奴隷にもなりたくなかった。

フィルダスは恩赦を拒否し処刑されることになった。「私ほもはや生きることを望まないし、死ぬことも恐れない。私は生きることに、死ぬことにも打ち勝つたのです。何の望みもないし、希望もありません。私はなにも恐れませんが。だから私は自由なのです」

この小説が書かれてから四〇年以上が経ち、物語の舞台はアラブ・イスラム圏のエジプトだが、自立と自由を得ようと苦闘するフィルダスの姿は、今現在も性の奴隷制に苦しむ世界中の少女・女性たちの状況を鋭く告発する普遍

的な力強さを持ち続けている。性的搾取、性暴力、父権制に呻吟する日本も例外ではない。

サーダウィはフィルダスの聞き取りをした数年後、同じクアナティール女子刑務所に政治犯として囚われるが、獄中で思わずフィルダスの姿を探してしまう。「彼女の生涯は悲惨であつた。……しかし、精一杯人生と闘わなければならぬことを彼女は教えてくれました。私たちの生きる権利、愛する権利を奪う暴力に対して、闘わなければならぬことを気づかせてくれました」

*参考・引用..鳥居千代香(訳)『0度の女く死刑囚フィルダス』(一九八七年刊、三一書房)



エリザベス Obuenza Elizabeth Aruoriwo さんにインタビュー

柳沢由実子

これは『FGM廃絶を支援する女たちの会』(WAAF: Women's Action Against FGM, Japan) 87号(2021年3月)に掲載された記事に手を加えたものです。WAAF(1996年発足)は、アフリカなどで古くから行われてきた女性性器切除の廃絶を支援する日本のNGOです。



https://www.youtube.com/watch?v=iE_iM_PqqzE&t=4s

日本で難民申請をしながら仮放免の形で二年以上暮らしているナイジェリア人エリザベスさんにインタビューする機会を得た。

二〇二一年二月にNHKのBSDキュメンタリー「エリザベス—この世界に愛を」の再放送を観て、ぜひお会いして話を聞きたいと思った。このBSの番組はエリザベスさんの日常を通して、難民申請している外国人たちの置かれた過酷な状況、入国管理局施設での収容生活、仮放免された外国人たちの経済基盤のない生活、難民に関する日本の法律の厳しさを伝

えるもの。YouTubeでまだ見られるので、ぜひ多くの人に見てほしい(右写真下に表示)。

エリザベスさんはナイジェリア人で一九六七年一二月生まれ、現在五十四歳の女性である。初来日は一九九一年二四歳のときで、その後一度日本を離れたが、諸々の事情からナイジェリアには入国せず、日本に戻った。現在二度目の難民申請中で、仮放免という身分で日本に滞在している。仕事をし、収入を得ることは許されず、健康保険にも入れない。暮らしの基盤のない不安な生活を送ってい

る。エリザベスさんは難民申請の理由をFGM（女性性器切除）から逃れるためとしている。

エリザベスさんの難民申請の理由がFGMであることを知って、WAAFスタッフは話し合い、FGM廃絶を支援するのを目的とする会として、何らかの形で支援しようということになった。三月八日、私はエリザベスさんに会うことができた。以下、エリザベスさん自身が語った言葉である。

出国、来日、そして現在までの暮らし

出身地はナイジェリアのデルタ州のアサバ (Asaba)。以前は付近のエド州などと一緒にベンデル州と呼ばれていた地域。私の部族はイズソコ部族。イズソコ（イッジョ）、セキリ、ウロボ部族が住む地域で、言葉はイソク（イッジョ）部族語。昔からFGMの慣習の根強い地方。女の子はみんなFGMをされていた。自分はFGMを強要する父親から逃げて、一四歳のときに家出。転々とした

のちUnilas (University Lagos) というラゴス大学のキャンパスに住みついた。故郷のアサバには家出した後、一度も戻っていない。

キャンパス（大学構内）で暮らしていたとき、裕福な友達のお親が、ナイジェリアは危ないから国外に出なさいと日本へのビザの申請をしてくれた。一九九一年、二四歳のときに初めて日本に来た。日本に着いたとき持っていたのは、観光ビザと二〇〇〇ドルだけ。日本語学校に通いたかったが、授業料が出せず埼玉県の住居付きの印刷工場、クリーニング店などで働いた。

その後母親に会いたくてナイジェリアに一度戻ったが、身の危険を感じたので入国せず、一九九五年にまた日本に戻った。現在まで日本を離れていたのはこの時の六カ月だけ。二〇一一年、オーバーステイ（不法滞在）で捕まった。その後も一度入管に捕まり、現在は仮放免の形で暮らしている。

エリザベスとFGM

FGMはイズソコ（イッジョ）部族の女の子全部がされていた。文化だからという理由で。やるのが当たり前。嫌とは絶対に言えない部族の慣習。FGMのタイプはクリトリスのカット。大量の出血を伴う。母親はFGMの後遺症で一生苦しんだ。母は一〇回以上妊娠したが、生まれたのは私一人。だから母親はFGMを強要する父から命がけて私を守ってくれた。実際私は何回もFGMを受けさせられそうになったが、その度に母親が守ってくれた。そしてついに一四歳の時、母の手引きで、従兄弟の男の子たち二人が手伝ってくれて、父親の家から逃げ出した。FGMを受けさせられた女の子たちは、残酷な目にあつた。出血死。流産。生後八日でFGMされた子もいた。私は一四歳で結婚せよとFGMを強いられた。逃げ出して窓から飛び降り、足をくじいた。今でも左足に障害が残っている。重い物が持てない。

父親は母親に残酷だった。母親

は父親から逃げずと隠れて暮らし、どこか別のところで死んだ。私は一人っ子。以前はたくさん知人がいたが、今では父も母も死んでしまった。ナイジェリアにはもはや知っている人は誰もいない。

（私たちの運動に、他の国の文化だから口出しするなという批判があつたと言うと、エリザベスさんは「確かに文化よ、でも、悪い文化よ」と声を荒立てた。FGM is a bad culture. Violence. FGM is a bad culture. 暴力です、と）

日本に来てからの暮らし

私はクリスチャン。神がいるからこの苦しみ、ここにいることに耐えられる。私のここでの生活は全て神様に捧げている。ここは私の国じゃない。でもここで生きていくためには神様の力が必要。困っている、収監されている人たちに元気を送り、神様の力を送る。昨日名古屋の入管施設でスリランカの女の子が死んだと知らせを受けた。私名古屋へ行く。私は呼ば

ればどこへでも行く。何か問題
あったら、私は力をつけてあげら
れる。ちゃんと話をして、リラッ
クスして、お祈りして。日本で安
全に暮らしたい。困っているのは
不法滞在で入管に捕まっている外
国人だけじゃない。コロナで若い
人、小さい子どもがいる女の
人、みんな困っている。自殺する
人増えている。私はそういう人を
助けたい。

私には家族がない、夫も子供も
いない、いるのは友達だけ。ここ
は私の国じゃない。もし何か問題
が起きそうだったら、私は静かに
している。ただただ神に祈ってい
る。一緒にいるのは神様だけ。た
だ、収監されている人たち、寂し
い。他に誰もいないから、私に電
話をくれる。私はそういう人たち
に会いに行く。会って、「神様は
あなたを愛しているよ、私もあな
たを愛している、頑張つて」と伝
える。

聖書を知れば人生変わる。私は
どこへでも行く。入管施設の中
にいる人は私よりもっと苦しい。一
緒にお祈りし、リラックスし、ア

ドバイスする。死ぬまで安全に暮
らしたい。平和に暮らしたい、そ
の気持ち。その気持ちだけ。

私はちゃんとした人間です。ナ
イジェリアでもここでも何も悪い
ことしていない。お酒もタバコも
ドラッグも犯罪も、何も悪いこと
していない。以前は毎日、家、会
社で仕事、教会へ行く、家、の生
活。今は仕事ない。今は毎日面会
が仕事。そして神様に祈ること。

エリザベスさんの言葉

I like Japan. It is peaceful. 日本
が好き。平和だから。

I want to live peacefully. 平和に
暮らしたい。

なぜみんな見ない？ 日本の入管
システムおかしいこと。日本人み
んな真面目な人、でも知らんぶり。
なぜ？ 日本人はみんな我慢。自
殺いっぱい。

I want to stop that in Japan.

Speak up! 私はそれをストップ

させたい。みんな声を上げてよ！

If they don't have hope, they
kill themselves. 希望がないと、
みんな自殺しちゃう。(入管に収
容されている人たちについて)

I want the change, not only for
foreigners, but also for Japa-
nese. 変化がほしい、外国人た
ちのためだけじゃなく、日本人
たちのためにも。

God gave me boldness. 神様は
私に大胆さ(勇氣、力)を与えて
くれた。

牛久の入管施設の職員、みんな今
では私が面会に行くことに慣れて
いる。みんな親切よ。「どうして
エリザベスにビザ(在留資格)が
出ないの、おかしいよ」と言っ
ている。地方へ行ったりしてしばら
く牛久の入管施設に行かないと、
どうしてた？ 元気？ と声をか
けてくれる。

緑内障で病院に通っている。左目。

目薬一日四回。手術は怖い。手術
して見えなくなることが怖い。片
方の目はあと三カ月ぐらいで見え
なくなるかも。もう一つの目もよ
くない。

仮放免の状態では、何もできな
い！自由に動くことができな
い。働くこともできない。難民に
対する日本の法システムが変わる
ように、働きかけましょう。私た
ちみんなが日本で安心して暮らせ
るように。

最後に、どんなサポートがほし
い？ と訊くと、ビザ(難民認定
証)と即答。それこそがほしいサ
ポートと、真つ直ぐに答えが返っ
てきた。エリザベスさんに連絡し
たい方はWAAFまでご連絡くだ
さい。

E-mail : waaf@jca.apc.org



-----FBから-----

新聞、テレビなどでは扱われなかったり、小さくしか載らない大事な情報が、フェイスブック（FB）やツイッター、インスタグラムなどのSNSで迅速にかつ詳しく伝わってくる。中に混じってくるフェイクや裏付けのない情報をはっきり世界で起きている出来事に目を向けていきたい。メディアでは新型コロナのニュースに覆われた感があるが、そのほかにも大きな問題が進行している。会のFBから抜粋して紹介。

*記事中のURLまたは写真をクリックするとリンク先に移動します。移動しないときは、印刷版の場合は、太字のタイトルで検索してください。

FB 投稿日（逆順）

6/4 ロサンゼルスのアジア系アメリカ人とラテン系のパンクロックバンド Linda Linda's。ドラムの Mina が経験したクラスメートからのアジア人差別をもとに作った 'Racist, Sexist Boy'。最高！

The Linda Lindas - "Racist, Sexist Boy" (Live at LA Public Library)

5月22日（LA 公共図書館のツイッター）

<https://twitter.com/lapubliclibrary/status/1395485852579495936?s=21>



5/28 40年以上も前のことですが、日本図書館協会の方が「図書館は言論の自由の砦です」とおっしゃったことが忘れられない。貸出履歴を警察に提供するなど信じられないことだ。いま、自治体の図書館は予算も少なく、「ニューヨーク公共図書館エクス・リプリス」のDVDさえ買ってもらえない。日本は文化政策の劣化も激しい。



図書館の貸し出し履歴、捜査機関に提供 16年間で急増 5月27日（朝日新聞デジタル）公共図書館が警察などの捜査機関に利用者の情報を提供していたケースが明らかになった。憲法が保障する「表現の自由」「内心の自由」を脅かす恐れがあるとして、日本図書館協会や専門家からは懸念の声があがる。<https://www.asahi.com/articles/ASP5V45Q1P5MUTIL03Z.html?fbclid=IwAR0BKaL3CG2GB4o82sKqGGcrmJh8qPAVY0pU8GEAI0FMWwPKcOrn2cGtIHW>

5/28 「父親」がなぜ逮捕されないのか。一人で子供は生まれない。

赤ちゃん放置し死亡事件 21歳の母親に懲役5年求刑 5月25日（NHK 東海）

……公園で出産したばかりの赤ちゃんを放置して死亡させたなどとして、保護責任者遺棄致死などの罪に問われている21歳の母親に対し、検察は懲役5年を求刑……被告の弁護士は「被告は意識を失っていたため赤ちゃんの命の危険性を認識できなかった。妊娠を誰にも相談できなかったほか相手から中絶手術の同意を得られず、病院からも適切なアドバイスを受けられなかった。被告1人が責任を負うのはあまりにも酷だ」と主張し、一部無罪と執行猶予のついた判決を求めました……（続報：5月31日、懲役3年、執行猶予5年との判決）

5/18

福島みずほ (<https://www.facebook.com/mizuho.fukushima.35>) 5月17日

今日は名古屋入管へ。亡くなったウイシュマさんの部屋へは妹さんたちは訪れることができたが、弁護士や国会議員は保安上を理由に行くことができなかった。2002年の名古屋刑務所事件の時は亡くなった人が入っていた保護房にはいった。今まで視察できなかったことはない。入管庁長官も弁護士や国会議員を部屋の中に入れていないことについては、了承済みとのこと。ひどい話である。

ウイシュマさんが亡くなっていくことについてビデオが存在する。そのビデオを見ればどのような状況であったのかかなりわかるはずである。しかし、入管側は、ビデオを公開をしない。本日、名古屋入管で、遺族である妹さんたちが強くビデオの開示を求めたが、入管側は拒否。なぜ拒否をするのか。悲痛な訴え。入管側は質問にちゃんと答えないという怒りの抗議が妹さんたちからあがった。その通りである。

5/18

国連・人権勧告の実現を！ ～すべての人に尊厳と人権を～ 5月17日

院内学習会 日本の人権問題を解決するために何が必要か！ 【主催】「国連・人権勧告の実現！」実行委員会

<http://jinkenkokokujitsugen.blogspot.com/>

5/6（6月1日現在、415,082人が賛同）

change.org

今すぐ賛同しよう 人々の命と暮らしを守るために、東京五輪の開催中止を求めます



Cancel the Tokyo Olympics to protect our lives

4/29 「ソファゲート」－欧州委員会の女性委員長であるフォン・デア・ライエン氏に「椅子」が用意されなかった。女性が平等に扱われるには道のりはいまだはるかに遠いとツイート。

会談で席がない… 女性の欧州委員長、トルコを性差別と批判 4月27日 (BBCnews Japan)

トルコで今月上旬に開かれたヨーロッパとの首脳会談で、欧州委員会のウルズラ・フォン・デア・ライエン委員長の椅子が用意されず、同委員長が困惑する場面があった。この出来事について同委員長は26日、「傷ついた」と語り、女性の権利保護に努めていくと話した。 <https://www.bbc.com/japanese/56897624>

4/29 「入管法をどう考えるかは、この国が外国人とどう向き合おうとしているのかの縮図だ」元入管職員の語る入管法・改正案の問題点

「これでいいのか」元入管職員が打ち明けた出入国行政の“闇” 4月29日 (毎日新聞)

入管法改正案の国会審議が山場を迎えている。1%に満たない難民認定率や上限のない収容期間、非人道的な外国人への処遇……。日本の入管行政に対しては国内外からさまざまな批判の声が上がっているが、改正案はこれら課題の解消につながるものなのだろうか。一昨年まで18年間、入国審査官として外国人の在留審査などに関わった元入管職員がインタビューに応じ、内部の実態について口を開いた。

<https://mainichi.jp/articles/20210428/k00/00m/040/270000c>

4/28 野党が勝ったのではない、これは票差の少なさを見れば歴然としている。

衆参補選・再選挙の結果が意味するものは今の野党への期待ではない一次期衆院選に向けて野党にとって逆風になる可能性も－田中秀征 元経企庁長官 福山大学客員教授 4月27日 (論座)

国民の注目を集めた参院長野選挙区、衆院北海道2区の両補欠選挙と、参院広島選挙区の再選挙が4月25日に投開票された。結果は、三つの選挙区ともに野党勢が勝利をおさめ、新聞各紙には「自民全敗」の大きな活字が踊った。

メディアが伝えるように、自民党に逆風が吹いたのは間違いないし、野党共闘が功を奏したというのもその通りだが、この流れが半年以内に実施される次期衆院選まで続く流れになるわけではない。それどころか、野党の対応次第では、今回の結果が衆院選に向けて裏目に出る可能性すらある……

<https://webronza.asahi.com/politics/articles/2021042700001.html>

4/23

プーチン政権の汚職追及で実刑 ロシアの活動家に自由を！－アムネスティ日本

政府批判の急先鋒として知られるロシアのアレクセイ・ナワリヌイさんが逮捕され、2年8カ月の実刑を言い渡されました。ナワリヌイさんはプーチン政権の強権を批判し体制エリートによる汚職を追及していました。そのために当局から目をつけられ「違法なデモを呼びかけた」などの容疑でこれまでもたびたび拘束されてきました。ナワリヌイさんもデモ参加者も、不当に自由を奪われています。彼らをただちに釈放するよう、プーチン大統領に要請してください…… https://www.amnesty.or.jp/get-involved/action/ru_202101.html

4/22 入管法改悪でなく人道にかなった改正を！

DVから逃れるはずが…なぜ入管に収容されて死亡したのか 4月22日 (毎日新聞)

「密室」で何があったのか。名古屋出入国在留管理局（名古屋市）に収容されていたスリランカ人のウィシユマ・サンダマリさん（当時33歳）が3月6日に通常の医療を受けられず死亡した経緯が、次第に明らかになってきた。入管職員の対応は適切だったか。虐待ではなかったのか。法務省・出入国在留管理庁が発表した中間報告や支援者による聞き取りなどで分かったこと、浮き彫りになった疑問点を報告する。

<https://mainichi.jp/articles/20210421/k00/00m/040/315000c>

4/21 リーン・イン・フェミニズム (LEAN IN = 「寄りかかる」フェミニズム (社会学者の菊地夏野さん)……もっと簡単に言えば「みせかけフェミニズム」ですね

「わきまえる女性ばかりの男女平等」に注意 社会学者の警鐘 4月18日 (毎日新聞)

政府の「女性活躍」をけん引してきた人たちの危うい言動に注目が集まっている。男女共同参画担当相の丸川珠代氏が選択的夫婦別姓制度に反対したことは記憶に新しい。一方、稲田朋美・元防衛相は選択的夫婦別姓に反対の立場を最近になって変え、自民党内でも女性の幹部登用などを求めている。両氏は立場が異なるようにも思えるが、「二人ともリーン・イン・フェミニズム (LEAN IN = 「寄りかかる」という意味の英語動詞から「体制の一員になる」フェミニズムという意味で使われる) を体現しており、言動に注意が必要です」と説くのが社会学者の菊地夏野さんだ。フェミニズムの新たな潮流として注目される「99%のためのフェミニズム宣言」(人文書院)の解説者でもある菊地さんに、「女性活躍」の中でも警戒すべき動きを読み解いてもらった……

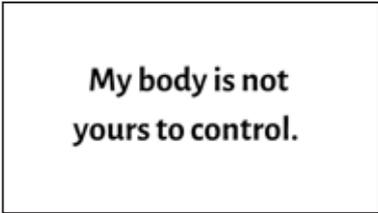
<https://mainichi.jp/articles/20210418/k00/00m/040/028000c>

4/17 私の身体は私のもの

change.org

緊急事態です！日本の女性の自己決定権を奪い望まない出産や妊娠継続に追い込む「配偶者同意」を廃止しよう

★ 活動内容・資料等はこちらから → 国際セーフアポーションデー Japan ウェブサイト：<https://2020-japan.webnode.jp>



4/15

【あの人の人生：キャサリン・スウィツァー】4月11日（Brut Japan）「なぜ女性にマラソンを走る権利がないのか」。1967年、当時女性の参加が禁止されていたボストンマラソンに、キャサリン・スウィツァーは自分のイニシャルで出場登録した。しかしスタート後6キロを過ぎた地点で、主催者たちが彼女の正体に気づく。マラソンの歴史を変えた女性の物語。

<https://www.facebook.com/brutjapan/videos/475000803615136>



4/14 2017年6月、憲法53条に定められた臨時国会の召集要求に、内閣が98日も応じず、98日後に招集した国会を冒頭解散したことについて、憲法違反として訴えていた訴訟の判決が昨日岡山地裁であった。判決は憲法上の義務としつつも、憲法違反かどうかは判断しなかった。原告は即日控訴。控訴審を見守りたい。

臨時国会の召集「憲法上の義務」岡山地裁、請求は棄却 4月13日（朝日新聞デジタル）

<https://www.asahi.com/articles/ASP4F551MP47PPZB007.html>

4/11

国連に逆ギレの上川法務大臣、問われる資質—「拷問、虐待」「国際法違反」特別報告者ら入管を批判 4月9日（Yahoo! ニュース）

国連の専門家達が入管法「改正」案に対し国際法違反だと指摘したことへの、上川陽子法務大臣の反応は極めて不誠実であり、大臣のとしての資質も疑われるものだ。

<https://news.yahoo.co.jp/byline/shivarei/20210409-00231750/>

「一票で変える女たちの会」かわらばん

★印刷版をご希望の方は左記FAX、メール、ホームページの問合せ欄からご連絡ください。

★投稿大歓迎！

「コロナ禍の中の暮らし、本や映画の紹介、地域での活動報告、選挙や地域の政治の動き、情報、ご意見、なんでもお寄せください。（一本について四〇〇字〜一六〇〇字）

宛先：1pyodekaeru@gmail.com
郵便：〒162-0823
東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックスNo. 45
FAX：03-5684-1412
mail: 1pyodekaeru@gmail.com
HP: <https://1pyo-de-kaeru.com>

★カンパのお願い
私たちの活動に賛同する皆さん、ぜひカンパを！

郵便振替口座：
記号番号 00110-6-420003

口座名称 一票で変える女たちの会
イッピョウデカエルオンナタチノカイ
銀行等から振り込む場合：
店名(店番) 〇一九(ゼロイチキョウ)
店 (019)
預金種目 当座
口座番号 0420003

